

共に創る図書館

～館長対談シリーズ①～

高石教育担当理事との対談



図書館の中で学生が生き生きとしている

吉本 本日は教育担当の高石理事から、図書館について色々とお話をお伺いします。よろしくお願いします。まず初めに図書館に対する印象はいかがでしょうか。

高石 私は50年くらい前に徳島大学薬学部に入学したのですが、その頃と今日拝見した図書館では全く印象が違いました。特に今日見て印象に残ったのは、学生がたくさん集まって生き生きとした顔で勉強をしていることです。本を調べたり、対話したりしている様子を見ると、昔では考えられない、本当に時代が変わったと感じました。

吉本 私の頃も同じで、昔は図書館というのは静寂なものだと思っていましたが、ここ10年くらいのうちに変わってきて、全国的にラーニングcommonsができ、学生支援に力を入れるようになりました。

情報化の時代だからこそ教養教育が必要とされている

吉本 利用者である教員や学生、卒業生、地域や一般の方が図書館に対して必要としているものについてどのようにお考えでしょうか。はじめに、学生が必要としているものについてお伺いします。

高石 今の時代は、コンピュータをたたけば情報が即出てくる時代ですが、私はやはりじっくりと紙に書かれたことを読んで、何を意図して書かれているのか、その奥を知るということが、特に情報化時代には必要なことなのではないかと思います。私は新書が好きでよく買うのですが、図書館には新書などがいっぱいありますが、そういうものの中には時代の流れとか、将来のこととかが書き込まれているので、それを読み取る力をつけていただき、本を読んで考えられる人になってほしいと思います。

吉本 今の学生は中学・高校を通じてあまり本を読

む習慣があまりないと思いますので、大学に入ったら本を読んでほしいですね。徳島大学では総合科学部や歯学部などで「読書レポート」を授業に組み込んで行っていますね。

高石 「読書レポート」はよい企画で、全学でやっていただきたいと考えています。大学に入って専門知識はいっぱい勉強しますが、大学というのは教養が本当に大事で、1+1が2で正解で単位をもらって、というのではなく、大学時代には本を読んで、自分が世の中のどの位置にいて、市民としてどう生きて



教育担当理事 高石 喜久
平成24年から徳島大学理事
薬学博士

いくのかということを考える力を身に着けてほしいと思います。今のようにITが進んだ時代だからこそ、図書館の本来の役割は、学生に本をどう読ませるかということではないでしょうか。



附属図書館長 吉本勝彦

吉本 教員についてはどうでしょうか。教員は電子ジャーナル等が普及してから、図書館に来られることは、スタディサポートをしているような一部の先生を除くと、ほとんどなくなりました。

高石 昔は私自身も、図書館の蔵本分館へこもり、冊子のChemical Abstractsで調べていましたが、今では、CASで構造式などを入れると、新化合物かどうか瞬時に分かります。本当に便利な時代になりましたが、そうすると先生は図書館に来なくなりますね。先生にも専門以外の興味がある教養の本などを読んでいただき、それを使えるようになっていただきたいと思います。図書館の方向性はそこにあるのではないのでしょうか。

吉本 図書館でも色々と考えていますが、教員を引き付けるためにはどうしたらよいかというのは、一つの課題です。

高石 例えば随筆のようなものを先生に書いていただいて図書館で冊子にすると、徳島大学にいる先生がこういうことを考えているんだということで、おもしろい気がします。

吉本 卒業生や一般の方に対しては、我々も地域貢献をしないといけないと思っていますが、すぐには思いつかなくて、まずは、県立図書館や市立図書館等との連携等に取り組んでいます。その他、講演会などに来ていただいたりして、地域の方に愛される図書館になりたいと考えています。

高石 地域の人にとっては、徳島大学は本をいっぱい持っているけど、1階のように学生がいっぱいいる雰囲気のところには入りにくい、という印象を持っているのではないのでしょうか。まずは入りやすい雰囲気をどう作るか、ということでしょうか。今は高大連携を言われていますので、高校生生くらいをターゲットにして、進められたらいいと思います。

教養教育の充実を

吉本 教養教育の充実に関してはかなり図書館と絡んでくる問題ですが、教養教育において図書館に期待することは何でしょうか。

高石 今年から教養教育院ができましたので、徳島大学の教養教育の中身をどうするかというのが私の教育担当としての役割です。徐々に学部と話し合いながら、どのように変えていくか考えていきます。答えはまだ出ていませんが、その答えは、図書館が本来持っている本、古典文学や哲学、心理学、そういったものの中にある気がします。

吉本 図書館では蔵本地区で実施している授業サポートナビを、常三島地区でも先生方をお願いしているのですが、なかなか行き渡りません。特に教養教育科目においてレポートを書く際に、参考とすべき種々の参考書が科目ごとに1箇所揃っていると、学生も取り組みやすいと思います。

高石 「読書レポート」などの教養教育の授業の中で、学生に本を読んで考えてもらうことを進めていくべきだと思いますが、これについては教養教育院で考えています。

アクティブラーニング、FD に関して

吉本 アクティブラーニングに関してはいかがでしょうか。実際にSIH道場などが動いていますが、図書館を利用したものとかはいかがでしょうか。

高石 アクティブラーニングについては、文科省(国立大学では唯一)から予算をもらって取り組んでいます。徳島大学の今の状況というのは、みんな

でアクティブラーニングとは何かということをも勉強しているところです。SIH道場というのは最初の入り口であって、本当のアクティブラーニングは、もう少し上級のレベルになって実質化されないと意味がないものです。そういう意味では、あくまで教育の手段であって、目的ではありません。学生が自主的にどれだけ勉強するようになったか、ということが大切です。私は、徳島大学の教育文化を変える努力を更に進めます。

吉本 教員のFDに関してはいかがでしょうか。図書館が直接関わることは少ないのですが、我々

は図書館機能をどう使って授業の改善がどうできるかということをも提案したいと考えていますが。

高石 今日図書館へ来て、私自身も、目から鱗で、話には聞いていたが、実際に現場に来て空気を吸わないと、図書館がやっているということが伝わりにくいですね。今日私に説明していただいたような簡単なツアーを、FDや毎年の新任教職員研修会などで取り入れられるのも一つの方法だと思いますし、やはり現場を見て知ってもらうというのが大切です。



第3期は学生の意見をどんどん取り入れてPDCAを

吉本 続いて、学生活動に関して図書館に期待することはどのようにお考えでしょうか。例えば図書館に関するものと、ライブラリーワークショップが公式サークルに認めていただいて活動がやりやすくなったと思います。

高石 学生が元気でなければ大学でないと思っています。私は、これまで文化系と体育系の2つのサークル系があったのですが、第3のサークル系としてサポート系を作りました。学生さん達が元気にサポート系クラブで活動していることは嬉しいことです。話は少しそれますが、学生の意見をい

かに取り入れて教育を変えるかということが、私の第3期の目標にしています。

私の反省しているところは、今までは学生に対してもいっぱいアンケートを実施しましたが、結果が学生に伝わっているのかどうかということについては、疑問です。学生はアンケート疲れしているようです。これからは、学生の意見をどのように取り入れるかという方法を検討して、アンケートの結果、どのように改善されたのかを学生に伝える、PDCAを回すシステムを作りたいと考えています。

今はチームワーク — 目的が一緒であれば出口は誰がやろうと関係ない —

吉本 他部局との連携の可能性について伺います。図書館では、授業の紹介ビデオとか、10分か15分くらいの反転授業用動画を授業サポートナビのウェブサイト配信していますが、eラーニングサポート室や総合教育センターICT活用教育部門との連携等について考えています。

高石 野地学長も言われているが、今はチームワークが必要だと思います。私自身は、学生に対していい結果を与えるのであれば、組織は関係ないと考えます。eラーニングや反転授業に関しましてはICT部門と図書館が情報共有して、縦割りではなくチームで進めていただきたいと思っています。

吉本 常三島地区であればICT活用教育部門とかeラーニングサポート室とかありますが、蔵本分館でもそういうサポートとしてどういう風に関わればよいか考えています。

高石 そういう垣根はないので、学生のためになるのであれば図書館であろうと学部であろうと結果オーライでやればいいと思います。蔵本地区は医療系が揃っていて、特に第3期は医療基盤教育のことがキーになります。医療教育開発センターと図書館が話していただいて、方向性が同じであれば一緒に進めていただけたらと思います。

一番大事なのは「学生のためになるかならないか」

吉本 最後に図書館職員に望むことをお伺いします。

高石 図書館職員に限らず、これからは職員と教員との垣根はないと思っていただいて、学生や大学のためにこうした方がいい、ということはどんどん言ってほしいと思いますし、そういう時代が来ています。学長が言われている「チーム力」は、まさに教員だけではなく職員も含めてのチーム力です。今は情報の時代なので、ネットで調べても分かりますが、図書館の会議などに参加し、徳島大学でも取り入れた方がいいと思うことは積極的に提言していただきたいと思います。これは大学の生き残る道であり、強くお願いしたいことです。

教育担当になって考えるのは、「このことは学生のためになるかならないか」、最終目標が「学生のためになっているか」ということです。ある程度は学生のためになるとしたら失敗を恐れず提案していただき、まずやってみることです。そういう組織にならないと徳島大学はもちません。

今の大学が置かれている状況は、第1期、第2期ときて、第3期は資金が無いと言われていますが、大学はいい学生を育てる必要があります。そのために必要な資金は注ぎ込むべきです。国立大学の中でも何もしていないところつぶれてなくなります。学内の組織でも同じで、活動しないと、守りに入ったところはいらなくなります。私は、野地学長と同じ思いで、チーム力で徳島大学を世界のtopに位置する大学にしたいと思っています。

吉本 ありがとうございました。ぜひ今後ともよろしくお願いします。

高石 今日は現場を見せていただいて、図書館が大きく変わって、学生のためになっていることがよく分かりました。本当に良い機会をありがとうございました。

